

# 1 古文 ねずみの談合

**鑑賞** 音もなく忍び寄る猫からどう逃れるか。談合の席で一匹が、猫の首に鈴を付けることを提案。しかし行動に移せる者は一匹としていなかった。実現の可能性もわきまえず口先ばかりのねずみを例に、「口は禍いの門」という教訓を伝える。

## 本文の解析

1 文目

ねずみの大勢集まりて談合しける。は、「いつも、かの猫といふいたづら者に捕らるる時、千度悔ひても、その詮なし。何度悔やんでも、その甲斐がない。」

古文の読解力を磨くには、文章を区切って読むのが早道。一文ずつ確認していきましょう。

### 口語訳

ねずみが大勢集まって相談していたことには、「いつも、あの猫という悪賢い者に捕られる時、何度悔やんでも、その甲斐がない。」「口は禍いの門」といって、現代語から古語に直そう。

2

かの猫、声を立てる。か、足音でもすれば、かねて用心して、捕られぬ。覚悟をもするなれども、密かに近寄りて来るゆゑ、折々油断して捕らるるなり。

猫が来るため時々

3

いかにせば良からんと言ひければ、一つのねずみ、進み出でて申しける。は、「それには何より良き手段あり。」

4

かの猫の首へ鈴を付け置かば、たとへ足音はせずとも、こなたに油断することはないだろうか。と言ふにぞ、皆々、「もつとも然るべし」と言ひける。が大勢のねずみの中より、誰あつて、「猫の首へ鈴を付けに行か」と言ふ者なれば、ついに、その談合は止みにける。

5

そのように、人も後先をわきまえず、考えありげに等しく、つひには恥をかくものなれば、「口は禍いの門」と思ふべきである。

### 品詞分解

……助動詞  
……助動詞以外の活用のある単語  
※敬語の場合は、敬語の意味と種類も付した。  
例 「言ふ」の尊・八四・用  
↓「言ふ」の尊敬語・八行四段活用動詞・連用形  
……活用しない単語  
※音便は○で囲み原音と音便の種類を示した。  
例 (く・ウ音)→原音「く」・ウ音便

……解答、解説は次のページに続きます。

あの猫が、声を立てるか、足音でもすれば、(私たちねずみは)前もって用心して、捕られない覚悟をするけれども、(猫が)密かに近寄りて来るため、(私たちねずみは)時々油断して捕られるのだ。

どうしたらよいだろうかと言ったら、一匹のねずみが進み出て申し上げたことには、「それには何より良い手段がある。」

あの猫の首へ鈴を付けて置けば、たとへ足音がしなくても、(こなた)が油断することはないだろうか」と言つと、みんなが、「いかにその通りだ」と言つたが、大勢のねずみの中から、ただの一匹も、「猫の首へ鈴を付けに行こう」と言つ者がいなかったため、ついに、その相談は終わってしまった。

そのように、人も後先をわきまえず、考えありげにしゃべる者は、ねずみに等しく、しまいには恥をかくものなので、「口は禍いの門」と心得るべきである。

- 問一 a いたすら b ゆえ c ころ (5点×3)  
 ㊦ (1)きょう (2)まいる (3)そうし (4)おじ (5点×4)
- 問二 ウ (6点)
- 問三 (例)猫が密かに近づいてくるかじ。(7点)
- 問四 (例)猫の首へ鈴を付けること。(7点)
- 問五 イ (7点)
- 問六 誰あつゝければ (完全7点)
- 問七 ア (7点)
- 問八 ウ (7点)
- 〈本文の展開〉①ねずみ ②良き手段 ③後先  
 ④まめまめ古典常識 丑 (4点×3) (5点)

採点基準 「猫が」という主語がある  
 「密かに近づいてくる」という内容である  
 ……2点  
 文末を「…から」「…ため」「…結んでい…」  
 ……2点

解説

問一 歴史的仮名遣いを確認する。

a「いたすら」の「し」は「す」に、b「ゆえ」の「え」は「え」に、c「行かう」の「かう」は「こう」に直す。歴史的仮名遣いについては左側下段の「文法の確認」を参照。

問七

比喩の内容を「しるす」。

直後に「等しく」とあるので、「了簡ありげに口をたたく者」が何と同じなのかを考える。前段落では、実際に猫の首に鈴を付けようと名乗り出る者が現れず、ねずみの提案は無駄に終わった。人間も、後先のことをよく考えもせずに自信があるように意見するのは、ねずみと同じようにわざわざいを招くということである。

問八

本文の教訓を「ふまえ」、慣用句の意味を「しるす」。

「口は禍ひの門」とは、何げなく言ったことが災難を招くことがあるので、話すことには十分に注意しなくてはならない、という意味である。「後先の勘弁なく、了簡ありげに口をたたく者」は「つひには恥をか」とあるので、よく考えもしないで意見することが「禍ひの門」となるということである。

本文ではねずみの行動を例に、実際に行動に移せる見込みもないこと(猫の首に鈴を付けること)をいかにも名案であるかのように唱えた行動を風刺し、このような教訓の提示へとつなげている。

問二

文脈に沿って口語訳する。

「然るべし」には、①そうするべきだ、②立派だ、③そうなる運命だ、という意味がある。ここはねずみの提案に皆が賛同する場面であるので、「そうするべきだ」の意味がふさわしい。

問三

主語を「しるす」、文脈に沿って内容を「しるす」。

——線①の直前に「くゆえ」とあり、理由がこの直前に書かれていることがわかる。「密かに近寄りて来たる」のは猫。

問四

文脈に沿って会話文の内容を「しるす」。

「良き手段」とは、ねずみが猫に捕られないようにするための「手段」。直後に書かれている、「かの猫の首へ鈴を付け置」くを簡潔にまとめる。ここは、密かに近寄ってくる猫への対策として、鈴を付けることで用心できるということを提案している場面である。

問五

文脈に沿って会話文の内容を「しるす」。

「あるまじ」の「まじ」は打消推量の助動詞で、「くないだろう」と訳す。以前は猫が物音も立てずに近づいて来たるため、ねずみたちは油断して捕まっていたが、猫の首に鈴を付けることができれば、鈴の音が注意を喚起して、油断することもなくなるはずだ、となる。

問六

文章の展開を「しるす」。

「止みにける」とは、「終わってしまった」という意味。なぜ談合が「終わってしまった」のか、理由は直前の「誰あつて、猫の首へ鈴を付けに行かう」と言ふ者なければ(27字)の部分である。

問四・問五で確認した通り、この談合の目的は猫に用心する方法を考えることであり、そこで「猫の首に鈴を付ける」という提案が出た。しかしねずみたちのうちただの一匹も、猫の首に鈴を付ける勇気をもつ者はいなかったため、計画は実現不可能に終わったのである。

文法の確認 ●歴史的仮名遣い

語頭以外の八行	ワ行	いはひ(祝い)↓いわい
「ゐ・ゑ・を」	「い・え・お」	まゐる(参る)↓まいる
「ち・つ」	「じ・ず」	もみぢ(紅葉)↓もみじ
助動詞・助詞「む」	ん	行かむ↓行かん
「くわ・ぐわ」	「か・が」	くわし(菓子)↓かし
イ段十う(ふ)	才段十う	まうす(申す)↓もうす
イ段十う(ふ)	イ段十う(ふ)	うつくしう(美しく)↓うつくしゅう
イ段十う(ふ)	イ段十う(ふ)	てふ(蝶)↓ちよう
才段十う(ふ)	才段十う	きのふ(昨日)↓きのう

出典 伊曾保物語(いそほものがたり)

江戸時代初期。作者未詳。古代ギリシアの寓話であり、西洋で広く親しまれていた「イソップ物語」の翻訳で六十四話を取っている。西洋文学最初の翻訳物である。

2

古文

絵の才能

鑑賞 平安後期の絵師として名高い藤原隆親の幼少期のエピソード。隆親が廊下の壁に描いた絵を見た客人は、その並外れた画力に目をみはる。そして彼の才能を軽視する父親に、決して才能の芽を摘んではならないと進言するのである。

本文の解析

1 文目

伊予の入道は、をさなくより絵をよく書き侍りけり。幼いときから絵を上手に描いておられた

2

父は(それを)おもしろくないことだと思っていた。おもしくくないことだ

3

伊予の入道が 無下に 幼少の時、父の家の中門の廊の壁に、かはらけのわれにて不動のひび 立ち 給へる を書きたりけるを、立ちなざっている

客人、誰とかや たしかに聞きしを忘れにけり、これを見問ひければ、書いたのでございますか

あるじのうちわらひて、これはまことしきもの書きたるに、は候はず。愚息の小童が書いて候ふといはれければ、幼い子どもが書いたのでございます

客人は、いよいよ尋ねて、然るべき天骨とはこれを申し候ふぞ。このこと制し給ふことあるまじく候ふとなんいひける

げにもよく絵見知りたる人なるべし。ほんとうに

口語訳 伊予の入道は、幼いときから絵を上手に描いておられた。

父は(それを)おもしろくないことだと思っていた。

古語リバーズ 現代語から古語に直そう。(伊予の入道が)ひどく幼少の時、父の家の中門の廊下の壁に、素焼きの陶器の破片で不動明王が立ちなざっているのを書いたのを、

客人の、誰とかいう確かに名前を聞いたが忘れてしまった(人が)、これを見て、「誰が書いたのでございますか」と驚いた様子で尋ねたので、

主人(父)は笑って、「これは本格的な描き手の書いたものではございません。愚息の幼い子どもが書いたのでございます」とおっしゃったので、

(客人は)ますます興味を持って尋ねて、「本物の生まれ持った才能とはこういうのを申すのですぞ。このことをお止めにならないことですよ」と言った。

ほんとうによく絵(の良し悪し)を見知っている人だ

\*完了・存続の助動詞「り」につきましては、四段活用(の已然形に接続するという説も)ございますが、本書では命令形に統一させていただいております。

解答、解説は次のページに続きます。

- 問一 (1) a オ b ケ c ア d ウ e ー (5点×5)  
 (2) b c d (完答6点)
- 問二 まるごと (5点)
- 問三 B ア C オ (5点×2)
- 問四 ウ (6点)
- 問五 父 (6点)
- 問六 才 (6点)
- 問七 (例)伊予の入道が絵を描くこと。(6点)
- 採点基準 「誰か」にあたる、「伊予の入道が」という内容がある…3点  
 「絵を描く」にあたる内容がある…2点  
 文末を「…こと」で結んでいる…1点
- 問八 客人 (7点)
- 問九 げにもよく (7点)
- 〈本文の展開〉①絵 (4点×3)  
 ②伊予の入道 ③天骨 (4点×3)  
 〈まめまめ古典常識〉ウ (4点)

解説

- 問一 品詞を確認する。  
 a 「よく」…活用せず、続く動詞「書き侍り」を修飾しているので副詞。形容詞「よし」の連用形をもとにしている。  
 b 「けり」…「ける」の連用形と活用する、助動詞「けり」の終止形。  
 c 「思へ」…動詞「思ふ」の已然形。

問六

会話の内容に注意し、人物の考え方をとらえる。

「伊予の入道」が絵を上手に描くことを、父は「おもしろくないこと」だと思っていたことが冒頭から読み取れる。この笑いは、息子の才能を軽視していることによる笑いであるため、ウやエは不適。

選択肢判定

- ア 客人が息子の絵が本物ではないと見破ったから。  
 イ 客人が「あるじ」の予想したとおりの質問をしたから。  
 ウ 「あるじ」も息子の絵のおもしろさに気が付いたから。  
 エ 息子の絵のよさが認められ、うれしかったから。  
 オ 息子の絵はたいしたものではないと思っていたから。

問七

指示語の内容をとらえ、省略された部分を補う。

「このこと」を「お止めにならないことです」と続いているので、客人が「あるじ」にどんなことを止めてはならないと言っているのかを考える。客人は壁の絵の描き手に大きな才能を感じ驚いたが、問六で確認した通り「あるじ」(父)はその才能を軽視していた。「客人」は、せっかくの才能の芽が摘まれてしまうことを恐れ、息子に絵を描くことを止めさせないように、と進言したのである。

問八

展開に注意し、指し示す人物をとらえる。

「よく絵見知りたる」人、つまりよく絵の良し悪しがわかっている人だからこそ、「客人」は「伊予の入道」の才能を見抜いたのである。

問九

本文の主題をとらえる。

最後の一文は、「ほんとうに絵の良し悪しを見知っている人だ」と客人の眼力に感心する思いが表れた文。「げに」という言葉が地の文で使われている場合は、筆者の感慨が込められていることが多い。

d 「たしかに」…「たしかなり」を終止形とする形容動詞。  
 e 「ぞ」…文末にあって、断定・強調を表す助詞。

問二

古文特有の読み方に注意する。

「客人」は歴史的仮名遣いでは「まらうど」と書き、現代仮名遣いでは「まらうど」と書く。「人」と書いて「らうど」と読む読み方には他に、「方人」(かたうど)、「藏人」(くらうど)などがある。

問三

文脈に沿って、古語の意味を正しくとらえる。

B 「気色」には、①(自然の)眺め、②(人や心の)様子、③意向、④機嫌、⑤ぎざしの意味がある。ここでは前に「おどろきたる」とあるので、「驚いた様子」の意。C 「無下に」は程度が強い様子を表し、ひどくという意味を表す。

問四

展開に注意し、人物の発言の意味を考える。

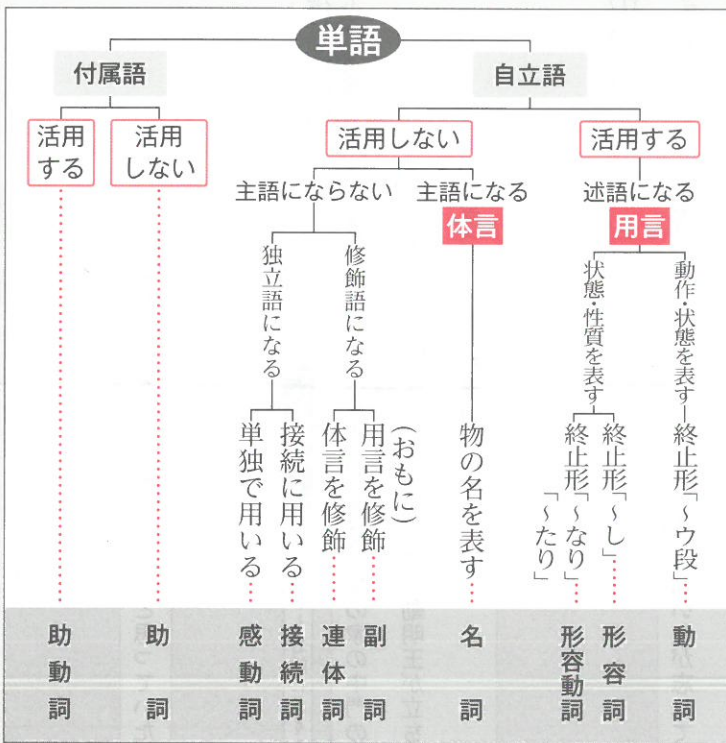
この直前の部分で客人は、「誰が書いて候ふにか」と、不動明王の絵を誰が描いたのかと尋ねている。絵が見事なものであったからこそ、誰が描いたものか知れたかったのである。

問五

展開に注意し、指し示す人物をとらえる。

古文においては同一人物の呼称が変わる場合が多くある。本文の登場人物は「伊予の入道」、「客人」、「父」であるが、これは「伊予の入道」の幼少期の話であるので、ここでの「あるじ」すなわち家の主人は「父」である。

文法の確認 品詞



出典 古今著聞集(ここんちよもんじゅう)

鎌倉中期、建長六(一二五四年)に成立した説話集。作者は橋成季。武士が台頭するなか、王朝文化への憧れを中心に、約七百話を分類して収録している。一般生活に材を取った世俗説話を中心に収めるが、仏教説話も多く含まれている。

16の解答 (本誌34・35ページ)

1 (1) 3 2 1 3  
 (2) 4 2 1 4  
 (3) 6 1 4 2  
 (4) 7 6 1 1  
 (5) 3 4 1 2  
 6 5 2 7  
 7 2 3 5  
 5 4 5 7  
 6 3 7 6

2 (1) 2 3 6 5  
 (2) 1 4 3 6  
 (3) 5 1 2 6  
 (4) 1 3 4 5  
 (5) 2 4 3 6

(5点×5) (6点×5)

2 (1) 2 3 6 5  
 (2) 1 4 3 6  
 (3) 5 1 2 6  
 (4) 1 3 4 5  
 (5) 2 4 3 6

3 (1) 2 3 6 5  
 (2) 1 4 3 6  
 (3) 5 1 2 6  
 (4) 1 3 4 5  
 (5) 2 4 3 6

4 (1) 2 3 6 5  
 (2) 1 4 3 6  
 (3) 5 1 2 6  
 (4) 1 3 4 5  
 (5) 2 4 3 6

(5点×5) (5点×4)

子無<sub>レ</sub>敢<sub>ハ</sub>食<sub>フ</sub>我<sub>ヲ</sub>也。(戦国策)

士<sub>ハ</sub>為<sub>ニ</sub>知<sub>ル</sub>己<sub>ヲ</sub>者<sub>ノ</sub>死<sub>ス</sub>也。(史記)

克<sub>チ</sub>己<sub>ニ</sub>復<sub>カ</sub>礼<sub>ニ</sub>為<sub>ス</sub>仁<sub>ト</sub>。(論語)

欲<sub>ス</sub>呼<sub>ビ</sub>張<sub>ヲ</sub>良<sub>ヲ</sub>与<sub>ニ</sub>俱<sub>ニ</sub>去<sub>リ</sub>。(史記)

無<sub>シ</sub>下<sub>シ</sub>為<sub>ニ</sub>将<sub>軍</sub>者<sub>ト</sub>也。(史記)

為<sub>ニ</sub>隣<sub>人</sub>所<sub>ト</sub>養<sub>フ</sub>也。(搜神後記)

花<sub>ハ</sub>発<sub>キ</sub>多<sub>シ</sub>風<sub>ノ</sub>雨<sub>ト</sub>也。(勸酒)

楚<sub>ノ</sub>人<sub>ニ</sub>有<sub>リ</sub>鬻<sub>グ</sub>盾<sub>ト</sub>与<sub>ビ</sub>矛<sub>ト</sub>者<sub>ト</sub>也。(韓非子)

法<sub>ハ</sub>令<sub>ハ</sub>所<sub>ト</sub>以<sub>テ</sub>導<sub>ク</sub>民<sub>ヲ</sub>也。(史記)

楚<sub>ノ</sub>国<sub>ノ</sub>人<sub>ノ</sub>で盾<sub>ト</sub>と矛<sub>ト</sub>とを売<sub>ル</sub>者<sub>ガ</sub>いた。

法<sub>ハ</sub>令<sub>ハ</sub>は民<sub>ヲ</sub>を導<sub>ク</sub>手段<sub>ト</sub>である。

花<sub>ハ</sub>発<sub>キ</sub>て風<sub>ノ</sub>雨<sub>ト</sub>多<sub>シ</sub>し。

隣<sub>人</sub>ノ養<sub>フ</sub>所<sub>ト</sub>と為<sub>ル</sub>。

将<sub>軍</sub>と為<sub>ル</sub>者<sub>無</sub>し。

張<sub>ヲ</sub>良<sub>ヲ</sub>を呼<sub>ビ</sub>て与<sub>ニ</sub>俱<sub>ニ</sub>去<sub>リ</sub>んと欲<sub>ス</sub>。

張<sub>ヲ</sub>良<sub>ヲ</sub>を呼<sub>ビ</sub>んで一<sub>ニ</sub>緒<sub>ニ</sub>に逃<sub>ゲ</sub>去<sub>リ</sub>うとする。

自<sub>分</sub>ノわがま<sub>ナ</sub>心<sub>ニ</sub>に勝<sub>ッ</sub>て礼<sub>ノ</sub>規<sub>範</sub>に返<sub>ル</sub>の仁<sub>ト</sub>する。

士<sub>ハ</sub>己<sub>ヲ</sub>を知<sub>ル</sub>者<sub>ノ</sub>為<sub>ニ</sub>死<sub>ス</sub>。

男<sub>ハ</sub>自<sub>分</sub>を知<sub>ッ</sub>てく<sub>レ</sub>る者<sub>ノ</sub>ため<sub>ニ</sub>に命<sub>ヲ</sub>をかける。

子<sub>ハ</sub>敢<sub>ハ</sub>て我<sub>ヲ</sub>を食<sub>フ</sub>ふ<sub>コト</sub>無<sub>カ</sub>れ。

あ<sub>な</sub>た<sub>は</sub>決<sub>シ</sub>て私<sub>ヲ</sub>を食<sub>ベ</sub>ては<sub>な</sub>ら<sub>な</sub>い。

楚<sub>ノ</sub>人<sub>ニ</sub>盾<sub>ト</sub>と矛<sub>ト</sub>とを鬻<sub>グ</sub>者<sub>有</sub>り。

楚<sub>ノ</sub>ノ人<sub>ノ</sub>で盾<sub>ト</sub>と矛<sub>ト</sub>とを売<sub>ル</sub>者<sub>ガ</sub>いた。

法<sub>ハ</sub>令<sub>ハ</sub>は民<sub>ヲ</sub>を導<sub>ク</sub>所<sub>ト</sub>以<sub>テ</sub>なり。

法<sub>ハ</sub>令<sub>ハ</sub>は人民<sub>ヲ</sub>を導<sub>ク</sub>手段<sub>ト</sub>である。